



Title	北海道の地域づくり，まちづくり：夕張から学ぶ（講演者 鈴木 直道，鼎談 日本計画行政学会北海道支部）
Author(s)	吉見, 宏
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 7, 53-54
Issue Date	2018-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71051
Type	bulletin (article)
File Information	060Yoshimi.pdf



[Instructions for use](#)

＜セミナー＞

「北海道の地域づくり，まちづくり—夕張から学ぶ—」

吉見 宏

標記セミナーは、日本計画行政学会北海道支部との共催により、2017年10月17日（火）に北海道大学学術交流会館小講堂で開催された。

本セミナーでは、まず、鈴木直道夕張市長による基調講演「RESTART Challenge More」があった。周知のように、鈴木市長は、夕張市の財政破綻後に東京都職員として夕張市支援のために派遣された。その後東京都庁を退職、夕張市長に立候補され、現在2期目の任期を務められている。

この間、日本で唯一の財政再生団体（いわゆる赤字再建自治体）である夕張市の厳しい舵取りにあたられてきた。しかし、夕張市の財政再生計画は、平成21年度から平成41年度までの21年間（赤字を解消する実質的な計画期間は、平成22年度から平成38年度までの17年間）と、前例のない長期間の計画であった。これは、この間に夕張市が独自の投資等を事実上できないことも意味しており、夕張市のまちづくりを考えると、当初からその実現性が疑問視されていたところでもあった。

今般、市長の指揮の下、夕張市は再建計画を見直し、2017年に総務省からこれが認められ、夕張市のまちづくりは新たなスタートを切ったところである。本シンポジウムは、夕張市がこのように再スタートを切ったタイミングにあわせ、人口減と財政難の中でまちづくりを進める、いわば日本の未来の縮図のような夕張市から何が学べるかをテーマとしたものである。

さて、基調講演においては、鈴木市長から以下のような内容が紹介された。

①夕張市の人口推移と財政破綻

夕張市の人口は石炭産業の拡大に伴い、1960年に116,000人のピークを迎えたが、その後石炭

産業の衰退に伴い1990年代半ばにかけて急速に減少した。特に高齢化は全国の中で最も高齢化率が高く、2017年には老年人口の割合は50%に至っている（札幌市の場合は、同年で26%）。しかしこのような高齢化の状況は、日本全国で進行していることでもある。



夕張市は、90年代以降、「炭鉱から観光へ」というスローガンでも有名になったように、観光産業への傾斜、投資が行われたが、この結果として夕張市は大きな「借金」を抱えて財政破綻することになった。

②夕張市の借金と国の借金

夕張市は、現在1秒間に70円の借金を返済している。これは、夕張市のホームページでも確認することができる。一方、国の借金は増え続けており、1秒間に815,000円増加している。2016年末では、国民1人あたり約840万円の借金を抱えている状況にある。

③コンパクトシティ化

夕張市は、旧抗口の周辺に集落が点在している構造から、広域に人口が分散している。また、旧炭鉱会社から継承した関係で、日本一公営住宅が多い市でもある。このことは、都市構造的にきわめて高コストであることを意味している。

しかしこれは、全国でも課題になっている「コンパクトシティ」を実現するにはプラスであるともいえる。古くなった公営住宅をスクラップアンドビルドして集約し、むしろ少なすぎる民間賃貸住宅の建設を補助金を出して進めるのである。しかし、実際にはこの計画は総論では賛成が得られ

でも、各論になると住民の反対も多い。だが、粘り強い説明は、かつての反対者を「最高の説明者」に変えていったのである。

④持続可能な公共交通を目指して

夕張市には、JR 北海道の石勝線夕張支線が走っているが、この路線について、夕張市は JR 北海道に対して廃線提案をした。2016 年 8 月 8 日に、市が進める施策への強力、JR が保有する施設等の取り扱い、JR 社員の夕張市への派遣、の 3 点を要請した。このような中で、現在は JR 廃線後の公共交通体系を策定しているところである。

⑤再び、エネルギー産業への期待

夕張は石炭によって発展した街であったが、石炭層から噴出するガスである CBM の推定資源量は、日本全体の年間天然ガス生産量の倍以上あると推定されている。2016 年には、日本初の事業化に向けて試掘が開始された。また、2017 年には、北海道ガス（株）との連携協定を締結した。

⑥課題先進地から課題解決先進地へ

このように、夕張は日本の課題の縮図のような街である。しかし再スタートを切るにあたって、夕張はその課題を解決していく、課題解決先進地になろうとしているのである。

以上の鈴木市長の基調講演は、ユーモアを交えながら聴衆を引きつけて 1 時間余に及び、日本や北海道が夕張市に学ぶべきことの意義の大きさを考える時間となった。

その後、鈴木市長の講演を受けて鼎談が行われた。鼎談者は、押谷一（日本計画行政学会北海道支部長・酪農学園大学教授）氏を司会に、吉地望（北海道武蔵女子短期大学教授）氏と、本センター長の吉見宏であった。なお、鈴木市長は、当初予定していた鼎談への参加はかなわなかった。

鼎談では、夕張市の将来への方向性、施策に対して高い評価が示された。特に、鈴木市長のリーダーシップに着目する意見も出された。

また、研究者の立場からみた財政問題への示唆、全国では必ずしもうまくいっていないと考えられるコンパクトシティの夕張での実現可能性、そして日本が直面している人口減少問題、高齢化問題に対する夕張市の経験の示唆と、北海道でも増加しているインバウンドとの関係、などが語られた。

